

中村素堂

四

書を習ってみると、字の数からいって、仮名は四十八字が一字ごとに書体が約七種平均あるとみても五百字はない。ところが漢字は何万というのに楷・行・草にいく通りかの書体もある。

この何万字がみな入用というわけでもないが、漢文を書き漢詩を使つてやることだから、稽古にせよ作品にせよ自分に読めないものを書くわけにもいかない。

それが前述のように土屋竹雨先生の講義、作詩のご添削をいただくなどとなると、漢字一字一字の意義が明確に判つていなければならぬのはもちろん平仄の韻まで知つていないと、作るどころか読むことさえも満足にできない。中学の漢字くらの力ではどうにもならない。

三楽書道会展の審査長は、今の二松学舎大学の前身、二松学舎(漢文の)専門学校の教頭であられた佐倉達山先生で、長く中国の漢籍を講じておられた老大家、それに河井茶廬先生偶社の創立の時に土屋竹雨先生をお願いしてくれたのは大東文化学院で竹雨先生の講座に学んだ真田但馬氏で、これは週社の方にも万葉会の方にも出て、何か斡旋してくれた。

こういう連中の助言やら紹介で若海方舟や私たちも、天保時代、江戸の大学者狩谷棧齋の創立した「説文会」という文字学専門の研究会の末席に加えていただけだ。私もが入会して二、三年した時分にこの説文会が創立満百年で、その記念祭が東京・神田の通称神田明神という神田神社で、平田篤胤の孫か彦に当たる平田宮司によつて麻かに行われ、棧齋の所蔵、著述書があつた社務所の大殿一ぱいに陳列され、人間ひとりの力でこんな偉大な仕事をなし遂げられるものかと驚かされた。

当時幕府経営の大学ともいえる湯島の昌平塾の大学者連でも、この民間の大儒が講ずる説文学に対抗できなかった、その講義のある日には何かと妨害をしたという話も本当だらう。それにしてもこの説文会が百年も継続されていて、明治の初めころには鳴鶴先生、重野安禪先生、東大の各先生の名も會員簿にあつたのにはびっくりした。

これは月に一回土曜日の午後一時半ごろから、神田明神下の閑順堂という和風貸席の三階の広間で開講され、安井小太郎(息軒先生の子)という老先生が師席に座つて、河井先生、高田竹山先生、斯文会の川上雷軒編集長など当年の漢字のそうそうたる名家がみな聴していた。ふだん人を人とも思わない若海方舟、真田但馬などの尻について中村素堂なども後ろの方にかしまつていた。

閑順堂というのがはしご段の急な建物で、しかもその三階まで八十翁の安井先生に登つていただくのは大仕事で、「オイ若いのは手を貸しなさい……」で、三人手を引くやらお尻を押すやらして上がつて座につく。紺の縞織の袴、茶の羽織。ちよんまげのないのが不思議なほどの老翁が正面の日本机に端座して、許慎の説文解字の半ばくらいのところを低い声で講じられる。塙保巳一の私学講談所や伊藤仁斎の塾などもそうだったろうと思われる。一種独自の調子で読んで下さる。テキストの本文とご自説との間がはつきりしないところへ、活字箱を眺めるような漢字の羅列、昼飯直後の時刻、日本間の蒸し暑さなどなど、条件の揃つている関係でもあらう、三楽書道会副会長の磯野学申先生の細長いあごひげが本の上に垂れてくる。若海方舟氏の軽い呼吸の出入りが少しオクターブを上げる。真田但馬氏は首を左右に振つては素堂を睨みつけるが、その眼は酔眼もうろうのようだ。

二時間ほどで御講説の終わる時分になると、みんなずつと起きていたような顔をして敬礼をするから奇妙である。どうも人ごとではなく、私も決して船を漕がなかつたなどとは申せないのだから困つたものであつた。(つづく)